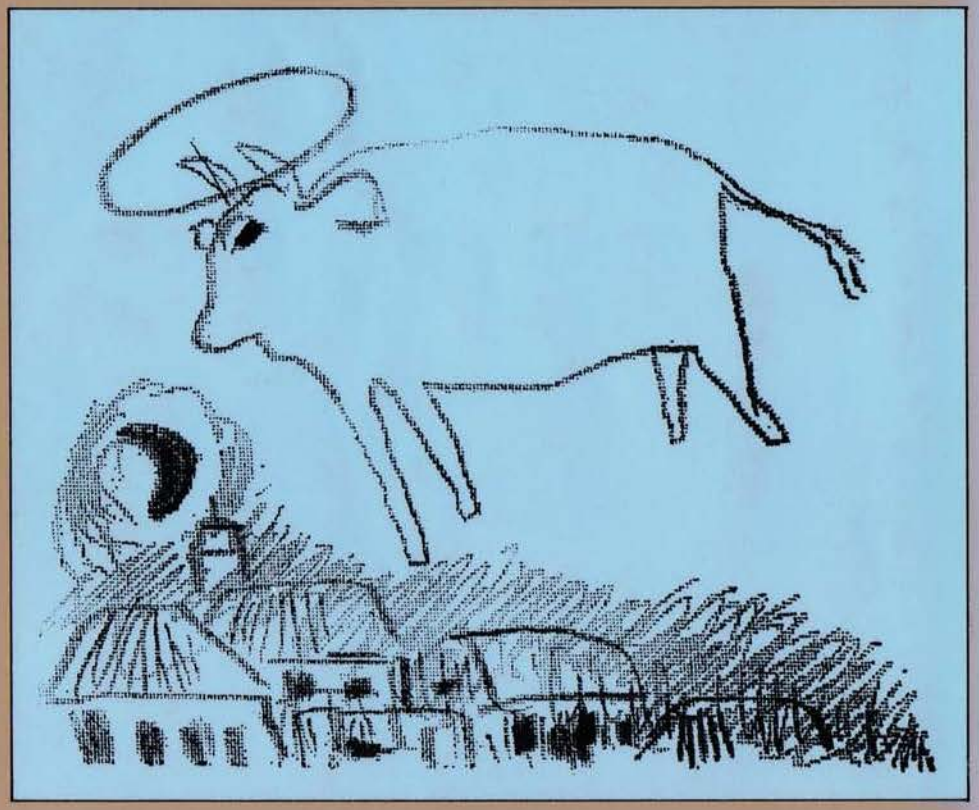
話の特集ライブラリー

岩城宏之の特集



ISBN4-426-14003-X C0095 ¥2000E　定価：本体2,000円＋税

04 杉並区立高円寺図書館
☎ 3316－2421
0415532712

岩城宏之の特集●目次

からむこらむ

親友悪友楽友　山本直純＋岩城宏之　194
ホワイトアスパラ宣言　三上寛＋岩城宏之　206
お見舞いインタビュー　岩城宏之＋和田誠　217
一家そろって阪神ファン　武満徹＋岩城宏之　227
流行らずに流行ろう　柳家小三治＋岩城宏之　237
祈　同部屋全場所制覇　同部屋優勝決定戦　九重勝昭＋岩城宏之　249
アナウンスミステリー　桜井洋子＋岩城宏之　261
国士、話の特集を叱る！　黛敏郎＋岩城宏之　271
宇宙人的音楽環境論　一柳慧＋岩城宏之　281
いま、本音の時代　磯村尚徳＋岩城宏之　292
伊勢神宮遷宮を巡って　古田武彦＋岩城宏之　303

小説・屋上の牡牛

イラストレーション＝山城隆一　321
句会初体験記　イラストレーション＝平松尚樹　314
岩城宏之のこと　妹尾河童　363
解説　黛敏郎　376
岩城宏之の特集　校了記念対談　回顧スペシャル　岩城宏之　矢崎泰久　370

装幀／和田誠　装画／山城隆一・和田誠

和田　ところで、ここにワープロがありますけど、今はこれで原稿を？

岩城　ええ。手術の前日に四十枚の原稿の締切でね。手術台に乗るまで原稿直してたんですよ。

和田　本当に文筆業みたいですね。

岩城　手術の直前はそれがあったから逆によかった。そっちに夢中になってたから。

和田　文章は昔からお好きだったんですか。

岩城　僕のオヤジが俳句をやってて、僕は幼稚園の頃から見よう見真似で俳句を作ってたし、言葉遊びの方が早いんですよ。音楽家になった頃に時々短いのを書いてたんですが、そのうち、音楽家は音楽だけでものを言うべきで、文字で言うべきでないとか言い出して一切書かなかった時代があって。約十六年前に桐朋大とか芸大の金権体質のひどさを『中央公論』に書いたんです。書き出したのはそれからですね。

和田　外国が長いから逆に日本語を書いていたいという欲求もあるんでしょうか。

岩城　ええ。僕はたまたま日本人として生まれちゃったんだけど、なぜか西洋から来た音楽が大好きで、それを商売にできるようになった。僕が日本人として最も抵抗がないのは日本語でものを書いて日本人に読んでもらうということで、これは日本人のくせに西洋音楽に凝ってしまっているやましさから少し逃げられるようなところがあるわけです。

和田　音楽はレコーディングされて残るということはあるけれど、そうでないことも多いでしょ。活字になって残ることの快感ってありますか。

岩城　あまりそんな気はないんだな。どんなに音楽がものを語ったとしても、具体的にはほとんど語れないでしょ。なるべく正確に人々に言いたいっていう感じですね。

和田　書きおろしの『森のうた』（朝日新聞社刊）面白くて一気に読みました。

岩城　太田圭という去年第一作目を作った新人監督が映画にしたいって。今シナリオを書いてるそうです。

和田　僕も実は映画を考えたんですよ。でも役者がきちっと指揮棒振るのはむずかしいんじゃないかと思って。

岩城　ヴァイオリンなんかだと弾く真似でもごまかせるかもしれないけど、指揮はどうしようもないんじゃないですか。よほど特訓しないとね。音楽がまた難しいですね。演奏の場面に出てくる音楽がある。オーケストラが演奏するシーンでは僕が振ってやろうと思ってます。もちろん映らないようにして。難しいだろうけど、一九六〇年生まれの監督がどうやるか興味津々なんですよ。なにしろ実現すれば生まれて初めて原作者というものになるわけでね（笑）

和田　楽しみですね。さて、長い時間話してくださっておつかれだと思いますのでこのへんで引き上げます。どうぞお大事に。

（1988年2月2日）

〈岩城宏之表紙インタビュー〉より

一家そろって阪神ファン

武満徹＋岩城宏之

音楽一筋なんてバカじゃないか

岩城　音楽以外にやりたかったことってあるでしょ。

武満　岩城さんと同じで、僕も文筆業に進みたかった（笑）。小説家になりたかったな。美術が好きだったから、美術評論もやりたかった。今も時々書いたりしてるけど。でも、いろんなことをやってる方が音楽もよくなりますね。忙しくやってる時の方が自分の書く音楽もいいみたいに思う。

岩城　僕なんかもいろんなことをやってるから非難ごうごうなんだけど、やっぱりそう思う。

武満　日本ではともすると孤高で沈潜した芸術家肌が尊ばれるところがあるけど、そうじゃない方がいいな。

岩城　自分の半分は厳然として指揮者であって、物書いたりいろんなことやったりする自分を軽蔑してる。いろんなことをやる別の自分は、なんだ、音楽一筋なんてバカじゃないかと思ってる。その葛藤は常にありますね。

武満　それはとてもいいと思うなあ。よくわかるような気がする。二重性を持たない人格はダメなんじゃないかと思ってる。

岩城　本職の指揮がすごく忙しい時にしか物は書けないですね。今日から一週間ヒマだっていうと絶対何もしない。そういう時、書きためたって全部ダメ。そんなに忙しいのにどうしてあんなにたくさん書いてるんだってよく言われるけど、忙しいから書いてるとしか言えない。

武満　生きていくボルテージが上がってる時に何かやらないとダメみたいだね。どうも最近の人の作品がつまらないっていうのは、普通の生活をしなくて音楽のことばかり思いつめてかくからだと思う。すごくマイナーで陰性になる。そういう音楽が多すぎるんじゃないかな。

岩城　僕は多くの作曲家を知ってるけど、たいていの人はい

ろいろ引き受けちゃって、うーんって唸ったりしてる。武満さんの場合は頼まれても、三年後の何月まではダメだとか、作曲スケジュールがしっかりしてるでしょ。ああいうことを確立してる作曲家は他に知らない。二つあるいは三つの曲を同時進行ということはないですか。

武満　それはできない。もちろん考えるのは同時にやってるし、材料はためていくというか、スケッチしておくけど。僕はわりと短期間に仕上げちゃう方だから、その一曲を仕上げるまでは他のことはできない。

岩城　作曲家って大抵真夜中に仕事してると思いこんでる人がいるけど、武満さんは朝型でしょ。

武満　三島由紀夫が書いてたけど、夜書いていいもの書けたと思ってると錯覚で、全然客観性がなくてダメだから朝型になったとね。

岩城　なるほどね。

武満　ただ、本職じゃないからかもしれないけど、文章を書こうという時は、夜少しお酒飲んでワーッと書くことがあるね。

岩城　僕は物を書き始める時は一滴もアルコールがない状態じゃないとできない。

武満　ない方がいいわけ？

岩城　そう。

武満　そりゃ本職なんだ。

岩城　いや。それで三分の二ぐらい行くと飲み出す。作曲の時は絶対アルコールはないですか。

武満　ないですね。作曲に入る時は精進潔斎をして、みそぎをちゃんとやる、というような気持ちがあるんだよね。酒飲んだ次の日なんてやる気がしないし。バッハの『マタイ受難』のピアノ版を全曲弾いてからでないと次の仕事に入らないというジンクスができちゃって（笑）

岩城　それは初耳だ。武満さんは、映画の方でも有名だけど、ひと頃は年間二百九十本ぐらい観ていたとか。

武満　もっと観てましたね。今は信州にいることが多いから随分減っちゃったんだけど、それでも、百五、六十本は観てますね。以前は三百本を越えてた。

岩城　へー。どんなものでも観るんですか。

武満　まあ、それだけ観るということは、どんなのでも、ありとあらゆるもの観るってことでしょうね。

岩城　映画音楽はこれまで何本書きましたか？

武満　八十本ぐらい。

岩城　案外少ないですね。

武満　それも、二十五年以上にわたってだから。黛（敏郎）さんとか芥川（也寸志）さんに比べたら全然少ない。それに予算の少ない独立プロの作品が多いし。

岩城　作曲料はよくないけれど、面白い映画ってやつでしょ。

武満　そうですね。でも、本当は、娯楽映画とか、ギャング

武満徹

映画をすごくやりたい。やっぱり映画は娯楽映画が面白いわけで、肩のこる文芸映画ばっかりというのはよくないよ。僕は六十年代にたまたま邦楽器を使ったでしょ。

岩城　ええ。尺八とか琵琶をね。

武満　そう、『怪談』とか『切腹』の中でね。それまで日本の映画で邦楽器をあんなふうに使ったことがなかったからか、よく時代劇を頼まれるんだよね。本当は現代劇で、ものすごくおかしいやつとかスリラーとかをやりたいんだけど。もう時代劇に邦楽器使ったりするのも飽きちゃった。来年、『利休』という、勅使河原（宏）さんの作品をやるかもしれないんだけど、ポルトガルから西洋文明が入ってきた頃の話だから、西洋音楽でやるつもり。利休が手前をやっている時なんかに、鼓がポーンなんて聞こえるのは、もう僕は厭なんだよね（笑）。そういう時に、ガンバなんかできれいな旋律が流れるって方がいいでしょ。ただ、僕は、東映のギャングものやヤクザ映画なんかは、津軽三味線みたいなものでやりたいわけ。ところが、トランペットが鳴ったりする。あれはあんまり合わないんじゃないかと思うんだけど。ともかく映画会社の人に、僕はすごくきれいな節が書けるんですからメロドラマなんかやりたいって言っても、先入観があってダメなんです。

岩城　ふだんから、僕はメロディ・メーカーなんだから、もっとヒット作品をどんどんやっちまいたいなんて言ってるでしょ。

武満　これから本格的にやろうと思ってるんです。ちょっと、今のところ極秘なんだけど(笑)。現代音楽の隘路を打開するには、少しはスキャンダラスなことをやらなきゃだめでしょ。ところが、七二年にロサンゼルス・フィルが来た時、日本側が曲目をすごくチェックして、彼らが組んだプログラムがほとんどできなかったわけ。プログラムにアメリカの現代曲が何曲か入ってたんだけど、全部蹴られちゃった。それで、ロサンゼルス・フィルのマネージャーが抗議した。六〇年代の終わりにN響が来たときには、黛敏郎を演って、私たちは喜んで聴いたと。一方的な文化外交はおかしいとね。要するに今の経済の問題と似たようなことなんだよ。

岩城　たぶんそのN響は僕が指揮したんだと思う。

武満　そうだろうね。おかしいのは、その時マーラーの一番がロサンゼルス・フィルのプログラムに入ってたんだけど、マーラーなんかとんでもないっていうことで、蹴られたんだって。

岩城　今はなんでもマーラー、マーラー。

武満　今や、外国のオーケストラを呼ぶと、「なんとかマーラーを一曲入れていただけませんか」っていうのが常らしいね(笑)。

岩城　今、業界の人がもっとも遅れてるんだよね。マーラーが流行りだすとマーラーを入れるだけの話で。ファッションであるだけですね。なんでみんなマーラーがいいのか、理解できない。

武満　七二年からわずか十五年ぐらいの間にやたらマーラーを演るということになってる。それじゃあ、日本の音楽界の体質が向上したり、実際に音楽ファンのレベルが上がってきてるのかといったら、そんなことはないんだよね。

岩城　ないですね。

武満　以前と同じなわけです。映画業界にしても物理的にテレビの影響で随分落ち込んでしまったわけだけど、他の国を見てるとその危機からかなり脱却してるんですよね。日本は未だにその後遺症がある。というのは、メジャーの会社の中に、映画産業に対するビジョンというものが全くないから。その時その時で当たって儲かればいいと思ってる。何年計画で企画とか路線をきちっと立てるというビジョンが全くない。ある独立プロの監督が今度こういう作品撮るんでやってほしいって言うんで、引き受けて、台本に名前まで刷られた。いよいよ配給が松竹に決まったら、その監督が来て、松竹が音楽が武満さんじゃ絶対に困る、配給できないって言ってるって。

岩城　一体どういうことなんですか。

武満　それ以前に『紀ノ川』っていう有吉佐和子さんの作品が、中村登さんの監督で映画化された。僕は、そのタイトル音楽に、鳥取地方に残っている野辺の送りの太鼓や鉦をたたく音楽を使ったんです。嫁入りの船がお嫁さん乗せて紀ノ川を下っていくというシーンに、その葬式の音を入れたんです。封建的な因習に対してのひとつの思い、というような意味でやってるわけ。主役が司葉子さんだったんだけど、あの人鳥取出身なんですね。試写の時、これは鳥取地方のお葬式の音だってわかって、松竹側が、結婚式のシーンに葬式の音楽を入れるとは何事だっていう騒ぎになった。「ウチは明るく楽しい松竹映画。結婚式に葬式の音楽を入れるような非常識な音楽家と仕事は二度としてはならない」(笑)ということです。

岩城　その映画は抹殺されたわけ。

武満　抹殺されてない。できあがっちゃってるんだから、お金がないしやり直しはできない。それが音楽賞とったりしたんだけど(笑)

岩城　映画音楽書く時はロケなんかには行くんですか。

武満　たまに行きますよ。セットの撮影にも行くし。現場を見ると随分助かることがあるわけ。『切腹』の時なんかも現場に行ってててすごくよかった。仲代達矢さんと三国連太郎さんが問答をやるシーンなんだけど、三国さんが待ち時間に扇子をパチッパチッてやってた。これは絶対にいいと思って、監督にあの音がほしいって言ったんです。扇子のパチッて音に他の打楽器の音が入る。

岩城　効果音も気になっちゃう方ですか。

武満　ええ。やっぱり『切腹』なんだけど、ある場面でウグイスを二声だけ鳴かしてくれと頼んだ。試写を観てたらリズムの感じが違うんで、もう一度観たら三声入ってる。あとで直しがあったらしくて効果の人が三声入れちゃったわけ。「あんなに約束したのにどうして三声にしたんですか」って効果の人に言ったら、「なにしろウグイスの声を入れればいいかと思ってました」(笑)。もちろん映画音楽って耳に残るきれいなメロディはすごく大事なんだけど、実際の音の設計が随分あってね。たとえば役者が何歩進んだところで音を入れるかで全然変わっちゃう。試写室にしてもいちばんいい状態にしておかなきゃいけないのに、現状は最悪なんだよね。映写機も音の設備も悪いしね。今はことにサウンドシステムがドルビーなんかを使って変わってきているんだけど、試写室はそれに対応できない。映画を作った人たちの意図していることが出てこないんです。

岩城　じゃあ、音で苦心した作品が、試写室で評論家に観られて書かれたりすると、凝りがいがないね。

武満　そうね。岩城さんも今度映画に出演したからわかると思うんだけど、映画作りっていうのは手間ひまかかる、手仕事みたいなところがあるわけ。僕なんかも映画の現場にいる人間だから、やっただけのことはちゃんと再現してもらいたいって気持ちがあるね。

阪神が優勝した年に作曲した曲は?

岩城　武満さんは迷球会の会長でしょ。

武満　会長じゃない、平会員（笑）

岩城　どういう会ですか？　何か資格がいる？

武満　会費を納入する義務があるだけ。音楽家仲間で作ってる会で、作曲家が僕を含めて二人で、あとはみんな演奏家ですね。かなりの人数がいます。毎年シーズンが終わった時に次のペナントレースの予想を立てる。今回のようにいろいろ問題があると、占いようがないんだけど。ことに僕が応援している阪神なんて今年は顕著だったでしょ。

岩城　セ・リーグだけなの？

武満　たまたまそうなっちゃってる。それぞれが納めた会費は、一位から六位までぴったりと当てなきゃ取れないから、繰り越していくんです。まだ、誰も当たったことがない。それと、自分が応援しているチームが優勝した場合、その年の終わりに忘年会を主催するという義務がある。

岩城　なるほど。聞いたところでは、随分凝ってる忘年会だってことだけど。

武満　そう、球団それぞれの地方の料理ということですね。でも、今のところ、セ・リーグはどうしたって巨人か広島でしょ。阪神は二十年に一回だから（笑）

岩城　あの歴史的な優勝の時、武満さんは何をご馳走したんですか。

武満　たこやきパーティをやるぞって言ったら、安すぎるってことで、しようがないから中国料理のかなり凝ったものに

した。本当は、虎が食えたらよかったんだけど（笑）

岩城　自分の好きなチームと予想がくい違う時もあるわけ？

武満　そうですね。その時は、一種のギャンブルだから。僕の今年の予想では、阪神はビリになっててね。だから、今日の時点では、僕の予想はピタリ当たっているわけ。もしかしたら今年は取れるかもしれない（笑）。誰も取れないまま何年か経ったら、みんなでハワイあたりに旅行することになってるんですよ。

岩城　僕もお誘いを受けてるんですが、去年「さらばジャイアンツ」って、『話の特集』に書いちゃったんで（⇩34頁）、今、去就に迷ってる（笑）

武満　今のところ大洋ファンがいないんですけどね。

岩城　うーん。でも、今は中日の星野さんがカッカ怒ってるのが面白いし、落合さんのことを毎日ハラハラしながら見てるわけです。ところで、阪神ファンになったのはいつ頃から？

武満　小学校から。ちょうど、藤村とか、別当とか、

岩城　土井垣とかいた。

武満　うん、僕は本郷の学校だったから、やっぱり巨人ファンが多かったんだけど、ひねくれてたのかな。父親が野球が好きでね。サラリーマンだったけれども、大学時代から野球やってて、六大学のアンパイアもしてたわけ。早く亡くなったんで、僕自身は父のことをよく覚えてないんだけど、男の子供を九人持って、野球チームを作るのが夢だったって、母親からよく聞かされました。

岩城　武満さん自身は、野球はやらなかったの？

武満　残念ながらやらなかった。父親はやらせたかったらしいけど。子供の時は貧弱で、なにしろスポーツ向きじゃなかった。うまかったのは鉄棒くらいだったよ。

岩城　奥さんもお嬢さんも、みんなタイガースファンでしょ。平和だね。

武満　それでももめるね。僕はどっちかというと大阪的タイガースファンなんですよ。エラーなんかすると、「このバカヤロー、引っこめ」ってなっちゃう。うちのやつらは、そうじゃないから、「いつもいい時に打ってくれてるのにそんな悪口を言って」ってことで内ゲバが起こるんです。

岩城　聞いた話では、ジャイアンツの選手がホームランを打った時に、お嬢さんがワーッと声援したら、武満さんが怒って食卓を引っくり返して、仕事場に行っちゃったって。あとから奥さんが来て「バカね、あれファールだったのよ」（笑）。その話で、お嬢さんは巨人ファンかと思ってたんだけど。でも、一家そろって阪神ファンなのにケンカしてるんじゃしようがないね。

武満　（笑）僕はちゃんとタイガースのキャンプも見に行ったことあるしね。神社の前で柏手を打ってお辞儀したことなんてなかったんだけど、タイガースの宿舎を訪ねていった時に、みんなが神社に行くのについて行って生まれて初めてやった

よ。

岩城　ひいきチームの全選手の背番号を覚えてる人がいるけど、そのタイプですか。

武満　いや、それがダメなんですよ、全く覚えてない。それで一度（山本）直純さんにものすごく怒られてね。ファンだったら全選手の背番号と生年月日ぐらい覚えてないとダメだよって。

岩城　僕たち音楽家って、たとえばモーツァルトのケッヘル番号がいくつかなんて知らないでやってるけど、アマチュアって知ってるでしょ。そういう意味ではプロ的なファンなんじゃないかなあ。

武満　村山の背番号は何番だって聞くんで、わからないって言ったら怒られた(笑)。当てずっぽうで言ったら、夜中なのにどこかに電話をかけて確かめてる。そしたら、やっぱり直純さんの方が当たってたね。

岩城　直純は阪神ファンだっけ？

武満　違うよ。今は日本ハム。もともとは、東映フライヤーズ。あの悪評の高いチーム。

岩城　山本八とか、張本とか。

武満　毒島とか、悪役がいたところね。あれが好きだったわけ。

岩城　この前夜中の三時に電話をかけてきて今日の試合はどうなったかって聞くんだよね。

武満　直純さんは常軌を逸することがあるからね（笑）

岩城　昔、駒沢球場があった頃に、同じく野球キチガイの藤原義江さんと行ったんですよ。駒沢は日本一、野次がきたないところだったんですが、一塁側つまり東映側からメチャクチャな、品の悪い大声の野次が飛んでるんで、フッと見たら直純だった（笑）

武満　僕のまわりはやはり、岩城さんを初めとして、巨人ファンが多いね。僕もタイガースファンだけど、長嶋は好きだったしね。

岩城　僕も、巨人ファンだったのは、と過去形で言うけど（笑）、長嶋さんのファンだった。王さんは尊敬してたけど、ファンじゃないんだよね。長嶋選手が監督になり、そして去った後、なんとなく精神的なつながりが薄くなってしまって。就職先も替えどきかな、なにも終身雇用の世の中ではないし、なんて感じでね。

武満　それがなかなかわりきれないんだよね。

岩城　そう、どうして、こんなくだらないことにこだわるのか。だから、いいんだけどさ。武満さんと仕事する時は、その時の阪神の調子によっておそるおそるになったりする。それをまた我々は楽しんでるんですよね。

武満　今、僕は朝型で、夕方からは野球観たりしてるんだけど、阪神が勝った次の日は仕事の調子がいいなんて思う。自己暗示かな。

岩城　阪神が優勝した年にはどんな曲を作りましたか？

武満　忘れちゃったなあ。随分意地悪い質問だなあ（笑）

岩城　逆に落ち込んでる時の方がいいとかね（笑）

武満　そうね。東京の阪神ファンというのは在野精神というか、野党的な立場だと思っていたんだけど、今やそういう性格はなくなっちゃったよね。だから、面白くない。

岩城　僕なんかは音楽家として、あの「六甲颪（おろし）」のくだらない大合唱は耐えられないんだけど、武満さんは？

武満　そう言っちゃ悪いけど、やっぱりあれは厭ですね。球場で見てると、巨人ファンはマナーがいいというかおとなしいね。阪神の方は、その点野蛮なやつが多い。阪神ファンは屈折しているというか、一種マゾヒスティックでね。勝っちゃ、あまり嬉しくない。毎年優勝しちゃダメで、二十年に一回くらいがちょうどいい（笑）

岩城　でも、元巨人ファンとしては、何十年に一遍の阪神の優勝を見てると、あれはあれで感動的に思うんだけど。それにしても、阪神はどの順位にいても面白い。できれば、一位かビリがいいけど。

武満　だから、僕は今年の予想をビリにしたんですよ。うちのやつらはみんな、賭けに負けることがわかっていても一位に入れる。僕は、逆に、賭けに負けて、一位になるんじゃないかという気持ちがありますよ。僕の方がそこまで深いわけ（笑）

岩城　一年に何回かは生で野球を観ますか？

武満　観ますね。東京だから、やっぱり後楽園か神宮で。あと、近いからたまに西武球場に行くこともある。あそこは湖から風が吹き込んで涼しいし、夏なんかビールを飲んでると気持ちいいからね。僕は野球を観に行くようになるまで、強い酒ばかりでビールなんて飲まなかったんだけど、球場ですっかりビールの味を覚えちゃって。

岩城　僕もふだんは絶対に食べないんだけど球場に行くと、ソース焼きそばが食べたくなる(笑)。球場で、「引っこめ！」とか叫ぶんですか？

武満　言うことあるな。神宮なんかでヤクルトとやったあと、阪神の選手がバスで引き上げるでしょ。うちの家族は、そのバスをギャアギャア言って追っかけてくもの、「真弓さーん」なんて叫びながら。僕はみっともなくて、とてもそんなことできない（笑）

岩城　でも、軽井沢の武満さんの家に行くとすごいものね。阪神の試合をやってると、三分ごとに武満さんがラジオを「切っちゃえ！」「つけろ、つけろ！」ってね。

武満　あそこは山の上だから、ほとんどあらゆる放送が入るんだよ。だから、東京で阪神の放送をやってなくても、大阪の放送に合わせてね。

岩城　どこかの放送だけは勝つんじゃないかとか（笑）

武満　東京にも「狂虎会」って、熱狂的なタイガースファン

の会があって、僕のところに熱心に勧誘に来るわけ。でも、僕は、ああいうメチャクチャなのはあんまり好きじゃないんだ。

岩城　それなりに節度を保ってると。大リーグは観ますか？

武満　球場では観たことはないんだけど、野球が違うって感じがするよね。

岩城　一見静かそうに見えるけど、何から何までスピードが全然違いますよね。

武満　それから打者にしてもピッチャーにしてもひとりひとりフォームが全く違う。よく日本でピアノの先生が、こういうフォームで、アームはこうして、こぶしを開いた形で鍵盤の上に乗せて、椅子はこのくらいで、なんて言うじゃない。でも向こうから来るピアニストを見ると、みんな、メチャクチャな姿勢で弾いてるよね。

岩城　自分に一番いい形で弾いてる。

武満　そう。日本はどうも、型にはめてしまう。野球の解説も、打者に対して解説者が、いちいちフォームをこうすればいいんですが、なんて言ってるでしょ。じゃあ、おまえ現役の時に打てたのかよって言いたくなる人がいっぱいいるでしょ。ああいう専門的な解説は、大リーグには全然ないよ。

岩城　客の方も、大事な場面の時には、何万人もの人が息を呑んでシーンとする瞬間がある。日本の応援団はワーワー騒いでいるだけで、野球なんか全然観ちゃいない。

武満　そうですね。ドームはいらしたんでしょ？

岩城　行きました。でも、あのうるささと言ったらひどくて、もう行きたくない。高校野球や都市対抗で、観客が大騒ぎするのはカワイイけど、プロ野球は技術が全く違うのに、観客は高校野球と同じ。

　つまり、いい奏者やいい舞台人には、いい客がつくでしょう。そういう意味で、こんな客ばっかりだと、日本のプロ野球は永遠にレベルが上がらないと思う。

武満　野球に限らず、すべてのことが、言ってみればガキ文化だよね。大人の文化にはなかなかなってないね。

（1988年8月7日　山の上ホテル）

〈岩城宏之表紙インタビュー〉より

流行らずに流行ろう

柳家小三治＋岩城宏之

ホッとするハナシ

岩城　僕、なにかで読んだんですよ、「煮凝りをよけて食べてるアメリカ人」という師匠の俳句。煮凝りの身だけよけてるんでしたっけ。

小三治　ええ。

岩城　バカげた質問なんですが、ということは、そのアメリカ人は魚は食わないということですか。

小三治　あれは大体鮫の皮を使うんですね。皮の断面図ってものは我々が見ても決して気味のいいもんじゃないんですね。煮凝りって言うと、どうやったって四角く切った切り口のところに皮の断面図が来て、何これーっていうあれでしょ。寿司も天麩羅も食うという通の外人も、「これねー。じゃあゼリーだけいただいときましょう」っていう感覚で。

岩城　（笑）

小三治　扱い慣れない箸でもって、ゼリーと皮をつっつきまわしながら、身だけよけてるというだけのことです。やなぎ句会の第一回目に詠んだんです（笑）

岩城　僕のオヤジが『千鳥』という俳句雑誌の選者をずっとやってたんですよね。僕は見よう見まねで、幼稚園の時から俳句やってたんです。覚えてる限りの作品第一号は幼稚園の時の「徐州戦雑煮を祝う暇もなし」っていうやつです。

小三治　ふーん、すごいね、それは。

岩城　季題も入ってるし、天才だなって（笑）

小三治　まして、その時世じゃ大変なもんですね。私は初めて俳句を作ったのは、中学二年の国語の時間です。今でもそうですけど、人が作ったものをやや手直しして、おまんまを食うというのが、噺家という商売につながってる。その時作ったのが、「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」の替え歌というか、「寝ころべば風鈴鳴るなり軒の下」。それで先生にひっぱ

ど、どうですか。

岩城　そのくらいの間違い構わないし、むしろ人間的でいいと思いますよ。

桜井　そういうこと気にしてたんじゃやってられないって部分もありますしね。かつてニュースを読んだあと十五秒ぐらい顔が出てしまったアナウンサーがいたんですって。その人の普段の口ぐせが、「チキショーこの野郎」でね。その時、「チキショーこの野郎」って言っちゃったんだそうです。今そんなこと言ったらもう大変ですけどね。

岩城　この間、「芸を語る」ってテーマで目加田さんと喋った時、ちょっとわからなそうだったんで「あと三十年もしたらおわかりになりますよ」って言ったんです。僕はちっともからかってなかったんだけど、放送では一番最後にそれが持ってこられちゃった。そうするとそこに意味が生じるでしょ。

桜井　なるほどね。

岩城　友人の目加田ファンから、我々の目加田さんを冷たくあしらったって言われたんだけど、そんな気はなくてね。

桜井　そういうことってありますね。アメリカなんかだと、三分インタビューしたとすると三分全部使うならOKだとかなりますよ。編集して三十秒とか一分にするならNOだとね。局側が勝手に編集して発言者の意図を曲げてしまうっていう時代はそろそろ終わりなんじゃないかと思いますけどね。こないだあるテレビ番組でのインタビュー受けたんですけど、恥ずかしいから絶対落としてくれって頼んだ部分をポーンと使われてしまってね。私たちはそれと同じことをいつもしているわけです。

本人の一番厭がるところがわりと本人らしいって勝手に使っているけど、そのあたり少しずつ考え直していかないといけないなと思いましたね。

岩城　僕なんか、たまにこちらが新聞記者とか雑誌記者にインタビューをすると、ざまあみろと思うわけです。

桜井　私自身、ずっとまさにインタビュアーなんですけど、この頃はインタビューされたりという場が結構多くなってきてますから、人の気持が少しずつわかっていくんですよね。インタビューする場合は間をうまく生かして次に展開していけばいいんですけど、まだまだ私なんかはできないんです。矢継ぎ早に次から次へと話を聞いていってしまうんですね。間をちゃんと生かせるようなアナウンサーになりたいと思いますね。

（1989年6月20日　渋谷・プレイバッハ）

〈岩城宏之表紙インタビュー〉より

国士、話の特集を叱る！

黛敏郎＋岩城宏之

『話の特集』に注文あり

岩城　表紙対談が二人とも話の特集の株主だというのは初めてじゃないかしら。

黛　画期的ですね。

岩城　僕は「からむこらむ」を十三年続けていて『話の特集』の同人みたいなものですが、『からむこらむ　パート2』を新潮文庫にする時に、どうしても黛さんに解説を書いてもらいたくて、お願いしたんです。黛さんの解説はとても面白くて感激した（↓367頁）。ところが、『話の特集』の読者らしい人から、「あの鬼畜の右翼のコンコンチキの大バカヤローの黛に解説を書かせるとは何事だ」という手紙が来たんですよ。

黛　（笑）

岩城　僕はそれに激怒して、反論したかったんだけど。僕も黛さんも、『話の特集』のいわゆる同人たちだって、それぞれたくさん意見を持ってるし、それが合わないことだってあるでしょう。『話の特集』自体にもいろいろな意見が載っていてガタガタしてるのに、どれかひとつだけにしろ、というのはファッショであってね。そういう手紙を書く人が、我が愛する『話の特集』の読者だってことが厭なの。黛さんが表紙になれば、その類の人たちから膨大な抗議が来るんじゃないかと楽しみにしてるんですけどね。

黛　大変勇気のある企画だと思います（笑）

岩城　これは編集長がエライんですよ。

黛　まぁそうですね。『話の特集』にそういう読者が少しでもいるというのは、読者の質が落ちたのではないかと非常に慨嘆する。僕は『話の特集』の将来のために、自分のような株主が少しでも発言権を確保しておくことは必要なことだと思うから、たとえ一億、二億積まれても株を売るつもりはないしね。現在の経営方針と編集方針の両方に憂慮と不満を抱い

ているんですよ。僕は株式会社として設立した時からの株主だから、それ以前の『話の特集』の状態もよく知っているけど、創刊から十年間ぐらいは本当に素晴らしい雑誌だったと思う。昔、『新青年』という雑誌があったんですが、当時の軍国主義に傾斜していた日本の中では、とてもリベラルな編集方針で、ある意味でのスノビズムがあって、少年だった僕たちの心に残る素晴らしいものだった。戦後、現れた『話の特集』はそれを彷彿とさせるような魅力を持っていたんですよ。モダニズム、リベラリズム、スノビズム、それからシニスム、アナクロニズム、インテレクチュアルな雰囲気があった。百家争鳴で、各人が言いたいことを言い合い、それがまた個性的であって非常に自由だった。ところが、ここ十年くらい、編集方針に偏向が見られるようになった。僕は株主として、それは危険だし面白くないとも思うし、かつての同人的な人々の何人かも同じ不満を持ってる。

岩城　僕は同人の中ではどちらかと言えば右っぽいわけです(笑)。革新的なことも言ってると思うけど、この雑誌にしてはかなり右っぽいことも言ってる。意見が違う人間であろうと、みんなで集まってワイワイやって、意見が違う部分は百家争鳴で行くのが好きなんです。それこそがリベラルだと思うし。

黛　『話の特集』とは、本来そのようなことを言うために作られた雑誌であって、それが信条だったわけ。僕が言ってる「偏向」というのは、特定の政党や政治主張に対して過度に思い入れが激しくなりすぎたため、それが編集方針に表れていることなんです。もちろん反体制だからいけないということではなくてね。僕は、ジャーナリズムとは宿命的に反体制的な色彩を持つべきだと思う。しかし、体制のやっていることだからすべていけない、反体制だからいいというのは厳に戒めなければいけないことで、左翼による言論封殺は右翼のテロリズム以上にけしからぬことだと思う。今はまさに社会主義や共産主義に対して世界中がNOと言っている社会情勢なのに、日本だけが社会党を救い主のように言っていますよね。これは大変な時代錯誤であって、『話の特集』ともあろうものの取るべき態度ではない。二〇世紀において共産主義は終焉を告げるということは、今、たくさんの人が言っていることですが、これだけ誤りが明らかになり、人間の将来のために害悪を流しているのが歴然としているのに、未だに一九世紀的、マルクス・レーニンの思想にかぶれて、恋々として夢を抱き続ける(笑)。それはそれでいいんですけれども、そっちの人の肩ばかり持って、感情的に消費税やリクルートがどうこう言っているだけではダメでね。人の尻馬に乗ってリクルートや消費税をたたいて、一部の人たちは溜飲を下げるかもしれないけど、そういう程度の低い読者に迎合するような編集を『話の特集』はやっちゃいかんですよ。もっとハイブローな、インテレクチュアルな人間が喜んで読み、寄稿するような雑誌にしてほしいと思う。矢崎泰久という人はもっと頭がいいはずなのに「狭間組」だとか何とか、わけのわからぬものはもういい加減にして欲しい。極言すれば、いまの『話の特集』で読むに値するのは「からむこらむ」だけです。

社会主義・共産主義は不要!?

岩城　僕はご存じのように、二回、参議院選挙に関係しましたけれども、それは、自民党から共産党まで全政党をこきおろすためでね。僕は反共主義で反自民党、社会党も嫌いですしね。この間、ウィーンのジャーナリストから面白い意見を聞いて、なるほどと思ったんだけど、要するに、社会主義・共産主義は、あのどうしようもない国、ソ連から出発したのが間違いだったと言うわけ。だから、ソ連的社会主義はダメになった。世界の中で、本当の社会主義を実現できる国があるのならば、それは日本じゃないかと。日本人は真面目だからあんなふうに破綻することはなく、もっと良い社会主義を作ることができるとね。

黛　いや、僕に言わせれば、日本はすでに社会主義ですよ。世界中の資本主義国の中では一番そうなってると思う。今度の税制改革もそうだけれども、日本ほど累進課税の率が高い国はないでしょ。日本で言う、いわゆる金持ちは、大体七五パーセントの所得税と一五パーセントの地方税を取られ、合わせて九〇パーセントなくなるわけです。アメリカやフランスではこんなバカなことあり得なくて、どんなに税率が高くても半分は手元に残る。税制ひとつ見ても、日本ではいかに社会主義的な政策が取られているかがわかると思う。福祉、その他、いろいろなことを客観的に見ると、日本は先進資本主義国の中では非常に社会主義国に近いわけです。今、岩城さんがおっしゃったように、社会主義・共産主義の国とは、かつての、農奴がたくさんいた頃のロシア、人口が十一億もいる中国、それから東ヨーロッパであり、これらの国はみな低開発国です。そういう国は、ある時期には発展するために社会主義・共産主義が必要だったかもしれないけど、一定のレベルまで来ると資本主義の方にだんだん近寄ってくる。これは人間の本性ですよ。人間とはやはり自由に生きたいという潜在的な欲望を持っているのに、全体のために個人の利益を犠牲にするのが建前の社会主義・共産主義は、その欲望を抑圧するわけですから。こんな人間の本性に反した思想が長く続くわけないでしょう。僕は、芸術を仕事にしているけど、芸術家にとって一番大事なことは自由ですからね。その自由が抑圧されているソビエトや中国から、ろくな芸術は何も出て来ていない。せいぜい体操だけですよね。

岩城　僕もしょっちゅう共産主義国、東ヨーロッパやソ連で仕事をしてるから、あの自由のなさというのは厭というほど知ってる。僕はこれまでゲバントハウス・オーケストラをよく振ってます。百八十人の団員中、共産党員は二人、それが

お目付け役でね。ゲバントハウス・オーケストラは東独にとって外貨を稼ぐ大切な武器なんだけど、メンバーはみんな、大反共主義者で、口を開けば東独政府やソ連の悪口ばかりで、二人の党員は小さくなっててね。僕はある楽員と非常に親しくて、よく家に行って御飯を一緒に食べたりしてるんだけど、中学一年生の子供がいるんですよね。親は反共主義者だけど、子供は学校で共産主義の教育を受けてるわけだから、その辺はどうなんだろうと思って見てたら、学校から帰ってきた途端に、お父さんと一緒になってソ連共産主義の悪口大会になる(笑)。だから、若者が立ち上がった今度の東独の事態がよくわかるんです。あれだけ子供に徹底教育してるんだから共産主義に文句を言ってるオトナたちがいなくなったら一枚岩になるかと思ってたけど、とんでもなかった。僕は比較的多く共産圏に出入りして、そういうのを見てるから、マルクス主義の理想は別にして、昔から反共なわけ。

黛　結論として言えることは、もう社会主義・共産主義はいらないということですね。そんなことは初めから僕にはわかっていた。

「リベラル」こそ身上

岩城　黛さんがおっしゃるところの「偏向」した読者に言わせれば、黛さんは右翼のコンコンチキということになるけれども、僕は、黛さんという人は、世の中の人がおもっているのと相当違う、実にリベラルな人だと、常に周りの人に言うぐらい、思ってるんですよね。黛さんがふだん言っていらっしゃることは、自分が考えてるよりもかなり大げさにおっしゃっている面がないですか。

黛　ありますよ、それは、世の中があまりにもバカだから。あまりに愚かな人間が多いから、それにショックを与えるために必要以上に誇大して言う面は確かにあります。

岩城　僕は親しいからそういう面を知っているでしょ。僕から見ると黛さんは世の中から大変な誤解を受けているところがあるし、黛さんもそれを承知の上で誤解されるのを楽しんでいる面がありませんか。

黛　うん、そういう面があるかもしれませんね(笑)。遊びと思ってやってはいないけど、人が騒ぐとなお面白がって、図に乗ってやるところがないわけではない、ということは白状してもいいでしょう。

岩城　本気と思っているとそうでもない、そうでもないかと思ってると本気だったりね。

黛　あなただってそうじゃない。どこまで本気で選挙の応援してたのか(笑)

岩城　それは誤解だ。僕が指揮者になりたてで、黛さんと初めて出会った頃は、僕も超ノンポリだったけど、音楽の話しかしませんでしたよね。黛さんはいつ頃から政治的な言動、行動を取るようになったんですか。

黛　いや、僕はそんなに政治に興味があるわけではないんですよ。ただ、日本社会のあり様を考え、そして自分の友人や芸術仲間たちがいうことややることを見ていると、あまりに世間や社会を知らなさすぎるせいか、バカバカしいことを彼らが考えていることにだんだん気がついたんですね。それと、僕はアマノジャクなところがあるから。たとえば六〇年安保の時でも、僕と三島由紀夫以外はみんな国会にいったようなものだけれども、僕は「あんなやつまで行くんだったらオレは絶対行くまい」と、逆に行かなくなっちゃうんですよ。

岩城　六〇年安保の時は僕もデモなんかに行かなかったんだけど、七〇年安保の安田砦攻防の頃は毎晩のように芸大の学生たちをホテルに集めて徹夜でティーチインやってね。とにかく悪の象徴の芸大をつぶそうと。一時芸大で大分紛争があったけど、実は糸を引いてた。その頃僕は山の上ホテルに住んでて、NHKの迎えの車が来ると、日大全共闘と機動隊の間を通るわけ。全共闘が彼らなりに日本をよくしたいという心情はわかるし、機動隊のひとたちも心の底では厭かもしれない。体制の権化のN響の指揮者が体制の権化のNHKの車に乗って、その真ん中を通って行くのは両方にすまないっていう気がしてね。

黛　(笑)上田哲が勢力をふるってた時代だから、NHKは多分に反体制でしたよ。今でもそうだけど。

岩城　上田哲さんと言えば、彼が選挙に出る時、当時のNHKの会長から電話がかかって来て、僕に推薦人になってくれって言う。僕は一切政治にタッチしたことがないからって断っても何回もかかって来て、とにかく会ってくれって。しようがないから代理のひとに会うことにしたんです。ホテルオークラの部屋で待ってたら、ドアが開いた途端に初対面の上田さん本人が、絨毯に土下座したのね。

黛　(笑)

岩城　どんなに断ってもダメでね。断り切れなくて推薦人になったんだけど。帰りがけに「岩城さん、NHKと何か紛争があったら私に」ってぱっと仁義を切って帰って行ったんです。厭だなあって思った(笑)。僕はノンポリのふりしていたんだけど、かなり政治に関わってたのかもしれない。

黛　若い時は、政治なんてバカくさくって、そんなものにかかずらうのは愚の骨頂だと思っているけど、ある程度自分の活動基盤が確立されて、その行動半径が回らなくなって来ると、厭でも政治に関わらないとできないことってあるでしょ。自分の力で政治的・社会的不合理というものを少しでも正していかないと、自分自身の仕事も確立できないし、世のため人のためにもならないという意識も芽生えてくるしね。

岩城　よく四十過ぎて初めて他の女を知るとグレて大変なことになるって言うでしょ。六〇年安保の頃、芸大の仲間でデモ行ってたりした人たちが、今ノンポリなのね。で、岩城が四十五過ぎてから急に政治運動をやり出したと、まるで、四

十五過ぎてから初めて浮気したみたいに言う(笑)。選挙の時は、音楽家仲間から非難されましたね。選挙に関わらせないための署名運動まであった。そんな音楽家たちのためにも日本の政治を良くしなければならないと思ったんだけど、彼らの援助だけは請うものかと、一切彼らに運動しなかった。孤立無援だったですね。

黛　そういうことを言う人たちが陰にまわると、文化庁の木っ端役人に、今年の補助金をもっと増額して下さいって揉手でやってるんですよ。

岩城　第二国立劇場が音楽ホールになるかもしれなかった頃、六人の人たちと、文化庁に一緒に行ってくれっていうんで行ったんですよ。そうしたらみんな、お忙しいところをどうも、なんて役人にペコンペコンでね(笑)。「百年後の子孫が感謝するものを作るために拙速で作らない方がいいから、今作ることはない。それと、国立劇場である以上、日本の音楽家、日本の音楽団体に優先的に使わすべきだ」って言ったのね。そうしたら呼び屋があとで怒ってた。国立劇場みたいな安いホールに呼びたいわけですよ。本当にあのペコペコにはびっくりした。

黛　ひどいね(笑)

岩城　国のことに反対しながら、陳情してお金もらってやってる。あれだけ反対するなら国からお金はいらないぐらいの気概があっても良さそうだと思うんですよ。だんだん黛さんと同じになってきた(笑)。日本には本当の意味の右翼はいないと思いませんか。

黛　それは言えるかもしれませんね。旗掲げて軍歌流して走る行動右翼っていますよね。あれは迷惑千万甚だしいね。どこから金もらってやってるのか知らないけど。ああいうものがいるから、我々本当の意味での右翼は困るんです。僕は右翼と言われてちっとも恥ずかしいと思いません。左翼と言われて恥ずかしくない人がいるのと同じでね。

岩城　僕は二回の選挙で「外国にいて遠くから見てると日本が心配でたまらない。国を愛するから心配なんだ。右翼の連中が国を愛しているとか言うけど、てめえらのだれが国を愛してるのか」って激しく言ったんで、我々のグループは常に右翼と共産党の両方からやられたんですね。で、いかにリベラルかとイバっていたんですけど。

黛　正論を吐く中道が右からも左からも攻撃されるのは世の習いであって、そういう意味ではリベラルは非常に危険度が高いんです。

岩城　このところ『産経新聞』っていう、どっちかと言うと右翼っぽい新聞に「直言」っていうのを書いてるんだけど、こないだ二回ほど過激なことを書いて、右翼から脅迫状がこんなに来てるから、もうちょっと柔らかくして下さいって言われてね。勘弁してくれって『産経』が言うんだけど、「署名記事を書いてるんだから、殺されるのは僕だ。筆は柔らかく

しない」って言ったんです。天皇の病気報道についても、「これではモルモットの実験結果の公表だ。国民の多数が敬愛するおじいちゃんが病と闘ってるんだから、もっとそっとしてあげられないのか」って書いた。そうすると、モルモットにたとえたらエライことになるって言うんです。それと「おじいちゃん」も「ご老人」に変えさせられた。「ご老人」と「おじいちゃん」では全然ニュアンスが違うでしょ。

黛　左も右も過度の言論統制はなんとかしないといけないですよ。テレビや新聞で喋ったり書いたりできない言葉が一体いくつあるか。本当に表現の自由に関わる問題ですよ。今に我々は日本語を喋れなくなりますよ。

天皇と天皇制

岩城　どんな国でも国の元首とか代表を必ず立てるでしょ。日本は安あがりで、効率のいい王様を実にうまく使っていると思わないですか。

黛　日本民族が古来から賢明だったと言えるね。天皇が持っている機能は大きく分けて二つある。ひとつは政治上の天皇という概念で、もうひとつは文化的な概念。平安朝以前から、暗黙のうちに意識しないで、この両方の側面を持った天皇というシステムが確立されていたわけですよ。平和時でも、平和でない武家政治の時代でも、自分で手を下さずに、臣下で一番優秀なやつに権力を委任してた。ある時は征夷大将軍、ある時は太政大臣とね。自分はその上にいて、一朝ことある時にだけ裁可を下してた。そういう制度は天皇が自分で確立したわけではなくて、長い年月の間に日本民族が作ってきた。有史以来天皇というものが象徴的な存在になっているからね。これを今やめてしまったら、ゆゆしい文化的損失だと思う。時代的な流れと国際情勢をわきまえた上で、感情論でなく天皇制の是非を論じるべきですね。天皇というのは非民主的でけしからんという論だけ横行しているけれども、誤解されるのを恐れず言えば、いったい民主主義なんてそんなに素晴らしい制度ですかね。

　こうした問題は、僕はもっと教育の現場で論じられるべきだと思うね。天皇というのがタブーになってる。学校の先生だって政治家だって自分の身の安全のためには、それに触れない方がいいんですよ。天皇制は使いようによっては弊害を生むけれども、うまく運用したら、こんなに平和的に権力の消長を左右できる仕組みってないよね。血を見なくて革命ができるわけだから。

岩城　昭和天皇には戦争責任があったと思うんです。少なくともあの人の名前で赤紙を出して、何百万人も死んだことは確かですよね。不思議なのは、戦地の兵隊さんの一部が死ぬ時に天皇陛下万歳って言ったってこと。あの時、東条英機万歳って言った日本人はいなかったと思う。

黛　病気で死ぬわけじゃなくて、厭々死ぬわけだから。誰だ

って人間は自らの死の意義を悟りたい、説明をつけたい。自分は日本の、祖国の将来のために平和の礎となって死ぬんだという確信が欲しいわけですよ。犬死にではありたくないから。その意義づけの言葉が、天皇陛下万歳なんです。それをもってして天皇に戦争責任があるんだと言えば、間接的にはある。しかし、それならば、日本にも、東条英機にももっと責任があるわけ。そうなると大東亜戦争がいったい何のために行われたのかという大東亜戦争是非論に戻ってくる。そこをはっきりしないと、天皇陛下の戦争責任問題は論じられない。あの戦争を始めた理由は何だったのか、あの戦争は何のためにやったのかというはっきりした定義が確立されないと、戦争責任論というのは成り立たないと思う。長崎市長が、昭和天皇には戦争責任があったなんて発言したけれども、自治体の長たる人間としては軽率千万、罪万死に値することで即刻解任されなければいけない。その辺の馬の骨が言うのは責任のない発言だからいい。だけど長崎市長という役職を持った人間が言う言葉ではないね。

岩城　友人とよく言うんだけど、日本中で天皇を神だと思っていた人はひとりもいないんじゃないかとね。僕は天皇と同じ学習院出身なんだけど、学校の廊下を歩いてると向こうから皇太子（当時）が来る。こっちは上級生だけど、後に宮内庁の役人が二人ぐらいついていると、「殿下」って会釈する。ひとりで来ると、途端に上級生になる。先にお辞儀するまで承知しない。しようがないからと皇太子がお辞儀してる時に侍従が来る。そうすると、「殿下」って（笑）。学友は誰も神と思っていないね。

黛　（笑）近くにいればそうですよね。ただ、僕は何度か昭和天皇に拝謁を戴いたことがあって、神だとは思わないけど、神に近い雰囲気を持っている方ではあったね。昭和二〇年までは天皇を見たら目がつぶれるって言ってた田舎の年寄りがいたでしょ。その人たちにとっては、天皇が未だに神なわけ。離れていれば離れているほど神格化は高まるわけです。

岩城　皇居前で無料奉仕で草むしりとかしてるでしょ。死んだ天ちゃんには、何となく可愛いカリスマ性はありましたね。あの人にごくろうなんて言われるだけで、目がつぶれるほど嬉しいとか。今の天皇は、友達ではないけど知ってるせいか、あまりにも普通過ぎる。良きにつけ悪しきにつけ天皇制の危機じゃないですか。

黛　カリスマ性というのは昭和天皇ほどないけど、そういうのをなくそうという宮内庁の政策があるでしょ。僕は憤懣やる方ないんですけど、礼宮さんの婚約発表されたでしょ。あんなけしからんことはないですよ。先帝陛下の喪が明けてないうちにお孫さんの婚約発表するとは何ごとか。宮内庁の人気とり策ですよ。浩宮さんの婚約者だってまだ決まらないから、順序だって逆でしょ。こうした浅薄な宮内庁の木っ端役人がいるから、将来の天皇制は非常に危険なわけ。今度大蔵省がご即位記念で十万円の金貨を出すんですよ。その図案を何にするかについて、何人かの人間が大蔵省に集められて意見を述べさせられるんです。大蔵省の腹は決まっていて、新帝のご肖像をコインにしたいんです。ご在位六十年の時にも金貨を出したんですが、天皇さんのご肖像をコインにして、もしそのコインが汚れたら大変失礼だと、僕を始め数人が反対してご肖像をコインにできなかったんです。その結果非常に売れ行きが悪かったんですね。大蔵省としては今度は、新しい天皇ご即位記念だからご肖像を入れたい。そこで僕は言ってやるつもりだ。どうしても新帝のご肖像を入れたいなら衣冠束帯のご即位式のお姿にしろと。お顔を出したら売れ行きがよくなるだろうとか、皇室の親しみやすさが増すだろうとかはとんでもない話ですよ。親しみなんかなくてもいいんです。権威というものは、自ら侵すべからざるものがなくちゃいけない。神秘性とか気品とかね。

岩城　僕は高校二年生から四、五年間天皇制に反対だった。学習院の頃から僕は木琴独奏を放送なんかして、スターだったんだけど、何かの時に今の天皇が、岩城君の木琴は下手だねって言ったそうでね。それで僕は長いこと天皇制反対になってた（笑）

黛　（笑）随分浅薄な理由だね。

岩城　そんなものですよ（笑）

黛　個人的怨念で天皇制を議論してるなあ（笑）

ある「配慮」の話

岩城　この話をして黛さん機嫌悪くなっちゃダメですよ。一度聞きたいんだけど、誰も聞けなかった話があってね。実は僕は高校生の頃から、白髪の塊があるんです。アメリカ人用の白髪をグレイにする粉があって、それにパーマ液をつけると、髪が真黒になっちゃうんですよ。白人が真黒になっちゃ困るけど、日本人にはいいじゃないかって僕は時々利用してる。本題に入ると、黛さんはカツラだろうかという説がある。

黛　（笑）それが言いたかったのか。

岩城　黛さんは毎年二月にパリに行く。パリに専属のがいて、少しずつ白髪を増やして巧妙にやっているんだってね。情況証拠はいっぱいあってね。ひとつは矢崎さんから聞いたんだけど、恐山に行った時、夜中に誰かオシッコに行こうとしてふっと見たら隣の黛さんがツルツルだったと。

黛　それはひどいよ（笑）

岩城　用心深い黛さんが、ザコ寝の時にはずすわけはないから、でたらめだと思うのね。だから、それは却下。それから、「題名のない音楽会」のスポンサーの重役さんが黛さんと御飯を食べた時、先生はカツラでいらっしゃいますかって聞いたら、黛さんは違いますって言って、それっきり口をきかなくなったという噂もあって。本当にそうじゃなかったら、そんなに怒るわけはないだろうと。

黛　それには思いあたることがある。黛さんはカツラだそうでって、しげしげ見るから、冗談じゃない、引っぱってごらんなさいよって言って引っぱってもらった。

岩城　他の情況証拠では、武満（徹）さんが、黛さんのウチで作曲の手伝いをして黛さんからお小遣いをもらって食いつないでいた頃、外へ出ようと黛さんを玄関で待っていたらなかなか出てこない。リンタロウちゃんに、「お父さんどうしてる」って言ったら、戻ってきて、「お父さん頭につけてるから遅れる」って。

黛　それもひどいね（笑）

岩城　どうでもいいことなんだけど、この際、NOならNOでもいいし。

黛　そりゃ、もともと濃い方じゃないから、人なみに多少の配慮はしてますよ（笑）

岩城　黛さんは謹厳実直そうで、怒りそうだけど、実は見かけとは違うところがあってね。芥川（也寸志）さんと團（伊玖磨）さんと黛さんの三人の会ってあるでしょ。

黛　今は二人になっちゃったね。

岩城　その会の使い走りを永六輔さんが学生時代にアルバイトでやってた。永さんは当時の御飯の話をよくするでしょ。團さんは、「お昼だから御飯食べにいきましょう、永君も食べてらっしゃい」って言う。芥川さんは、「永さん、お昼だからこれで御飯食べなさい」と言ってお金をくれる。黛さんは、「永さん、お昼だから一緒に御飯食べに行きましょう」って、誘ってくれる。大抵の人は、黛さんが、お金あげないで御飯食べてらっしゃいって言う人かと思っちゃう。世の中の人は本当に誤解してますね（笑）

黛さんは最近曲を書かないから、日本の若い音楽家の中には、作曲家だと認識しないのまで増えている。黛さんの「涅槃交響曲」が出たからこそ、日本は世界で最も作曲家の層が厚い。バカモノの若い作曲家は、靖国神社かなんかばかりやってる人だとか思ってるけど、黛さんはまだ歴史になっちゃいけない作曲家なんです。

黛　これ、ちゃんと録っておこうね（笑）

（1989年12月18日　渋谷・コートダジュール）

〈岩城宏之表紙インタビュー〉より

宇宙人的音楽環境論

一柳慧＋岩城宏之

新しき釘は打たれる

岩城　一柳慧という作曲家は三段階で変貌してると思うんです。これからどう変わるかはわからないけど。作曲を始めた子供の頃、毎日コンクールで入賞した頃はヨーロッパの音楽の影響を受けた曲を書いてたわけでしょ。

一柳　まあ、そうですね。

岩城　次にアメリカに行ってジョン・ケージに師事して、不確定要素の音楽を盛んにおやりになった。そして、十年ぐらい前からは再び音符をガッチリ書くという今の感じになった。一番最初、普通の西洋音楽を書いてた頃は無意識にそうなったんですか。

一柳　無意識というよりも、環境でしょうね。僕が住んでた渋谷・猿楽町は空襲で焼けなかったんで昔オヤジやオフクロが買ってきた楽譜が少し残ってたんですね。

岩城　お父さんはチェリストですよね。

一柳　父の時代、大抵の人はドイツに行ったんだけど、オヤジはフランスに行ったんですね。二十年代の華やかなりしパリを経験して、フランスのものを仕込んで帰ってきた。だから、極めてフランス的な環境の中につかってたし、原智恵子さんとか宅孝二さんとか平尾さんとか先生達もフランス帰りの人達だったですから。

岩城　その頃の作曲ってなかなか聴くチャンスはないわけですが、とてもフランス的ですか。

一柳　そうですね。

岩城　アメリカに行く前から一柳さんはコンクールに入賞したりして結構偉い作曲家だったわけでしょ。

一柳　いや、散々批判を浴びてました（笑）

岩城　批判を浴びるってことは、曲を聴かされる人の数が多かったわけですよね。

そうしたら誰がこんなバカげたことを続けてくれるだろう。当然牛は殺されるだろう。天寿を全うさせるためには、何よりも飼主のぼくが天寿を持たなければいけないのだ。いつ飛行機がとか、いつ自動車に、なんて考えると、心配で居ても立ってもいられなくなる。

ぼくが全然売れなくなり、収入が跡絶えることだってあるかもしれない。長患いをしても同じだ。どうも牛の天寿には悲観的になる。こちらの都合の良い時に死んでくれないか、なんていう天寿もおかしなものである。野生の牛というものが存在しない以上、牛に天寿を思ってはいけないかもしれない。野生がいたとして、若くてライオンに食われれば、これはやはり天寿ではないか。自然の出来事なのだから。

結局牛という動物が家畜として存在するだけのこの世では、子牛として人間に食われるのも、七、八百キロになって食われるのも、そのことがもう自然であって、どの牛にもそれなりの天寿があると思ってもいいのかもしれない。

牛小屋に昇った。牛はこの何日かずっと怯えている風だった。こういう時は喜ぶことをやって慰めてやらねばなるまい。テープのスイッチを押した。幼いメェーの声がスピーカーから出て来る。今はもう舌の練習は必要ないのだが、長い間使った初代のテープが古くなり延びてしまって、半年程前だったが山羊の牧場に行って新しいのを録音し直して来たのだ。

牛は新しいメェーに突如興奮した。大勃起した。腰を左右に揺すって、悩ましげにメェー、メェー叫んだのだった。初めての発情だった。もう成牛になったのだ。去勢していないのだから当たり前だ。赤飯ものだ。この時に備えて、コペンハーゲンのおとなのおもちゃ屋で、超特大のマスかき器を買って来てあったのが、威力だった。ダッチワイフをオランダからと思ったが、局部だけを買うことが出来ないので、結局北欧のにしたのだ。

元来牡牛は発情した牝牛を近づけなければもよおさないものだ。だがこの部分だって、食い物としては珍味なのだから、ちゃんと鍛えてやらなければならない。牛は新しい幼いメェーに夢中のようだった。だから普段の舌の訓練は古いテープを使い、毎月一回オナペットちゃんの声を聞かせてやって来た。先週やったばかりだが、仕方がない。ずっと怯えさせてしまったから、お慰めしなくてはなるまい。

せっせと手を動かしながら考える。種牛は十歳位まで現役だそうである。でもそれは良い種を採るための効率からのことで、ヨボヨボになってもなお盛んな人間の牡も多いことだ。こいつがとてつもなく長生きして、もうとっくにあっちが駄目になったぼくが、骨ばった手でマス器を操ってやっている情景が頭をかすめた。

（1980年9月号）

岩城宏之のこと

妹尾河童（せのおかっぱ）

岩城宏之は〝電話魔〟である。

岩城とは三十数年来の友人だから、改まって「さん」づけも照れるから省くことにする。

岩城宏之は、〝電話魔〟である。ぼくも人から同じように呼ばれるが、彼とは比べものにならない。スケールが違うのである。岩城から電話がかかってくると、つい「いま何処？」と聞いてしまう。「ベルリンだ」と答えるときもあるし、「メルボルン」と言うときもある。都内からの電話と同じように、平気で三十分も話すので、電話料を心配してしまう。彼は「話したいと思うときにかけてるんだから余計なことを言うな。電話代のために仕事したっていいじゃないか！」と怒るので、言わないことにしているが……。

かつてパリから夜中の二時半にかけてきて、一時間四十分も話した記録もある。

彼からの電話は、『からむこらむ』と同じように面白い。だから、〝イワキの国際長電話〟はいつも大歓迎である。近頃ちょっと回数が少なくなったようだが、もっといい話し相手を見つけたのかな？

岩城宏之は指揮者である。

彼が指揮者であることを知らずに、この『からむこらむ』を読む人はいないだろうから、改めていうまでもないと思うが、彼は〝凄（すご）い指揮者〟なのである。なにが凄いかというと、世界中のオーケストラを指揮するために飛びまわり、十ヵ月は海外で、あとの二ヵ月を跳び跳びに日本で暮らしているという多忙さや、一年間に彼が旅をして移動する距離が、平均二十万キロメートルに及ぶということも凄いのだが、ぼくは、

彼の描いている〝ロマンが凄い〟と思う。

岩城は、かねがね日本の文化までも中央集権化が進むことに疑問を持ち、もっと各地方ごとの文化を確立すべきだという主張をしていた。そしてどこかにこんなことを書いていた。

「ヨーロッパ各国、特にドイツの各地方都市では、それぞれ特色を持った文化が生まれ育くまれている。それが色々な面に反映し、その国の政治や経済面全体のバランスをよくすることにもつながっている。ところが、日本ではその反対に、ほとんどの文化が東京発である。これらが国際的にも、〝日本は自己中心的〟と見られる考え方を生む根源にもなっているようだ。だからぼくは、明治期の『廃藩置県』とは反対に、あえて『廃県置藩論』を唱えているのだ」と。

彼は、それを実証するためかのように、十年前、わざわざ『札幌交響楽団』の音楽監督に就任した。岩城宏之は『NHK交響楽団』の終身正指揮者であり、『メルボルン交響楽団』の常任指揮者でもあるのだが、特に『札幌交響楽団』への肩入れは強い。彼は「この『札幌交響楽団』を〝日本のクリーブランド〟にしてみせる」と言っていた。『クリーブランド・オーケストラ』というのは、二十年前までは、アメリカのオハイオ州にある無名のオーケストラであった。それをジョージ・セルという指揮者が世界屈指のオーケストラに育て上げたのである。岩城が宣言した通り、今や『札幌交響楽団』は、日本で三指に入るオーケストラに成長した。大阪、東京での演奏会で、北海道地域以外の音楽ファンも実際の音を耳にし、噂にたがわぬ演奏に感動した。『からむこらむ』の各編から読みとれる岩城宏之のヒューマンな思想の具現が、『札幌交響楽団』の音から見事に聴きとれる。彼の行動が、いつも言葉だけではない証である。

岩城宏之は悪戯(いたずら)好きである

岩城宏之は偉大な指揮者であるが、堅く尊大な人間ではない。お馴染みの、あの人なつっこい笑顔と同じように、好奇心に満ちた少年の心を持っている。どこの国でも、少年は悪戯好きである。普通は大人になると、人間だけではなく動物も、生活の上で役に立たない悪戯はしなくなるものだが、岩城は大人になっても続けている。ここでエピソードを紹介する代わりに、一冊の本を紹介する。文春文庫から出ている『河童の対談・おしゃべりを食べる』を買ってほしい。ハッキリ言うと、などことわるまでもなく、これはぼくの本の宣伝である。その本の中の〝岩城宏之との対談〟は抱腹絶倒ものなのでぜひ読んでみてほしい。傑作な話をここで紹介したいのだが、それには枚数が少なすぎる。

岩城宏之はヘソ曲がりの照れ屋である

『からむこらむ』の文中から、彼が発する「恥ずかしい」という言葉や、それに類する表現が幾つあるか数えようかと思

ったほど、岩城宏之は〝恥ずかしさ〟へのこだわりを持っている。ときにそれと正反対に破廉恥なことをやっているように見えたりするが、それも全て、恥ずかしさから逃れるための裏返しの行為なのである。『からむこらむ』の中の「御歳暮大合戦のイヤラシさ」や「恥ずかしい公開往復書簡」などを読むと、彼の気質が、レントゲンのCTスキャン的に見えてくる。実に〝照れ屋〟で、少年のように〝ヘソ曲がり〟である。ぼくはそんな彼に共感するところが多い。〝ヘソ曲がり〟な彼は、いわゆる〝美談〟が嫌いである。つまり人に見えるかたちで美談が転がっているわけがないと思っている。カッコいい演出臭があるウサン臭さが嫌いなのだ。といって彼が本当の美談を拒否しジンマシンを出す男かというとそうではない。人に知られることがないはずの美談にもし彼が出会ったら、ひょっとすると、他の人以上に感情移入をして涙を流すかも知れない。彼は、覚めているくせに感激屋だから。

ぼくは、彼の〝恥ずかしさ〟を知るゆえに、〝ヘソ曲がり〟であり〝照れ屋〟であることに、バランスのよさを感じ、彼の感性や価値観を信用している。

一見彼はなんでも思ったことを言っているように見えるが、実はそうではない。この『からむこらむ』を書き始めた動機を、〝まえがき〟に記しているが、少しだけ違う部分がある。彼はかねがね『話の特集』という雑誌に書きたがっていたのである。ぼくが連載しているのを読んで、「嫉妬に狂う」とか、「ヘンな雑誌だよな。書いてる連中の顔触れのヘンなこと。ホント言うと実は、ぼくもあの中に入りたいんだよ。ワー恥ずかしいことを告白してしまった」とか盛んに照れていたのである。だからこそ、ぼくが矢崎編集長に、彼を紹介する場面につながるのである。あの執筆依頼の場面は、〝無理やり書かす〟という恰好にしないと、ヘソ曲がりの照れ屋の彼を登場させることができなかったのである。あれは苦肉の作なのであった。で、ジョークっぽい手書きの契約書を直ちに作成し、収入印紙の代わりに、消し印のある郵便切手を貼りつけてハンコを描いたりしたのである。その冗談ぽい大騒ぎの中に、岩城宏之の真面目さや真剣さを垣間見た思いがした。相当の覚悟がないとスタートできないことを彼は感じていたのであろう。まず、原稿を書くことの他に物理的な心配もあったはずだ。彼が転々とする国によっては、郵便事情がきわめて悪い地域もある。それだけではなく、〝からむ〟という設定のコラムで、厭味なくしかも辛辣な〝からみ〟をずっと書くというのはかなり苦行であるはずだ。彼はワイワイ騒ぎ笑いながら、自分の中でやり続けられるかどうか、自問自答したことだろう。彼の答えの出し方は、いつも気紛れ風を装いながら、実は誠実な裏付けがある。だから、いま現在も、延々と『話の特集』の紙上に連載が続いているのである。『からむこらむ』の読み取り方は人さまざまだと思うが、ぼくは、彼の文章を楽しむと共に、最後の〝発信地〟を見るのを毎回楽

しんだ。それは、彼の文章の生まれた背景の匂いも嗅ぎとれるからである。

なんだかこんなことを改めて書き綴っていると、ぼくも照れ臭くなってくる。ぼく以上に〝ヘソ曲がり〟で〝照れ屋〟の彼が、これを読んで、恥ずかしさから逃れるために、どんなふうにからんでくるか、少し心配になってきた。

（1987年6月　新潮文庫版『岩城宏之のからむこらむ』より）

解説

黛　敏郎

岩城宏之氏が、いつの頃から文筆にいそしむようになったのか詳らかにしないが、かれこれ二十年になるのではなかろうか。

もともと文章を書くことが大好きだったそうだし、指揮者という、いつも大勢を相手に威張ったり、怒ったり、機嫌をとったり、恐縮したりしなくてはならぬ商売をしていると、たった一人で書斎に閉じこもり、ワープロ相手にニタニタしながら文章を綴るのが、リクリエイションになるという事情もよく判る。

とにかく結果として、十冊になんなんとする著書が私の書架に並び、「週刊朝日」の連載は終ったようだが、「話の特集」の『からむこらむ』は十年くらい続いている。その他、あちこちで散見する文章のおびただしさ、健筆ぶりは驚嘆に価いする。守備範囲にしても音楽はもとより文化一般、政治、社会、スポーツ、ファッション、旅行、料理……可ならざるはなく、しかも驚くべきことには、何を書いてもとにかく読ませる。時として牽強附会、「待テヨ？」と首をかしげさせること無きにしもあらずといえども、必ず何らかの主張があり、視点のユニイクさと相俟って、読者に或る爽快さを感じさせるのだ。用語の選定、語り口の旨さなどまさに絶品、特に本業の指揮ぶりにも相通ずる修辞のリズム感覚は冴えわたっている。こんな文章の達人に指揮などさせておくのはモッタイないというものだ――と、まァ最大級の賛辞を呈しておくが、いささかヤッカミとカラカイの気持も混入していることは、賢明な氏がこれを読めばすぐ感じる筈である。

私はかつて、氏を最高のガクタイと称したことがある。ガクタイとは〈楽隊〉、つまり音楽家たちが自分を謙遜して、あるいは半ば自嘲的に蔑んで呼ぶ言葉であるが、同時に、お高くとまった芸術家気取りに対するカラカイや、反骨の精神もこもっている。総じて昨今の若い音楽家たちには、このガク

タイ根性が無くなってきて、心あるわれらガクタイ馬鹿どもを嘆かせているのだが、わが岩城宏之は、まさにガクタイのカガミなのだ。

本人はイッパシ世事に通じているつもりでも実はトンと浮き世ばなれしていたり、つまらぬことに凝りまくって本体を見失ったり、イタズラやアソビが大好きでいい歳をしながら茶目ッ気が抜けなかったり、といったガクタイ気質が氏の愛すべき人間性を支えている。(かく申す私も、岩城氏をして云わしむればガクタイのハシクレという有難い評価をいただいているので心安だてに云わせて貰うが……)

ただその愛すべきガクタイ気質も、氏がこのところ打ち込んでいた「革自連」とか「狭間組」とかいうウサン臭い政治活動に反映されることになると、私としては些か異論もあり、手放しで喜んでばかりもいられないので敢えて一言申し述べさせていただくが、それはこの本に収録された『からむこらむ』の文章の初出誌「話の特集」と関係がある。

四半世紀ほど前、創刊当時の「話の特集」はスバラシイ雑誌だった。名編集者矢崎泰久氏の目を瞠るばかりのユニイクな企画で、ちょうど戦前の「新青年」(……といっても私はまだ幼少の頃でおぼろげながらの記憶だが)を彷彿とさせるモダニズムとアナクロニズム、リアリズムとシュールレアリズム、エロティシズムとグロテスク、ペダントリーとナンセンス、リベラルで八方破れで、取り澄ましていて、俗っぽくて、ハイブローで……とにかくフシギな魅力に溢れた雑誌だった。五木寛之、野坂昭如、永六輔、藤田敏雄、神吉拓郎、深沢七郎、筒井康隆、横尾忠則、和田誠、妹尾河童、山藤章二、赤塚不二夫、黒田征太郎、篠山紀信、立木義浩……といったイキのいい面々が、同人のような雰囲気で集まり、ここを根城として世にアピールしていった。昭和四十年代のリベラリズムを基調としたさまざまな芸術思潮は、「話の特集」をヌキにして語れないだろう。

その「話の特集」に二十年ほど前、経営危機が訪れた。バックアップしていたスポンサーが手を引いたのである。自主経営でやるしかなくなり、皆が持ち寄りで出資して株主となり、細々と続けることになった。私も株主の一員となった。以来、二十年ほどの歳月が流れるうちに、雑誌の内容がだんだん変わってきた。

あの六〇年安保の時でさえ特定の政治主張に偏することなく、リベラリズムを貫いた「話の特集」が、著しく反体制化し、左傾していったのである。いちばんの原因は、もともとそうした思想傾向のシンパでもあった矢崎編集長が、文筆のみならず行動によって主張を貫こうとし始めたこと、中山千夏女史の参議院選挙立候補支援のため「革自連」という政治団体を結成し、「話の特集」がその機関誌化していったこと、等が上げられる。かつての同人的グループの多くは、こうした傾向に疑問を持ったり、嫌気を感じたりしたのだろう、徐々に離れていった。現在、創刊当時のメンバーは、ほとんど雑誌に登場していない。

岩城氏の『からむこらむ』連載が始まったのは、ちょうどこうした過渡期の初めの頃だったと記憶する。そして氏は、持ち前のガクタイ的心意気のなせるわざか、単なる常連の寄稿者以上の同志として「革自連」を支援し、あげくの果てには比例代表区の第何番目かの候補として、参議院選に出馬するにまで至るのだ。私は、ここにこそまさに氏の面目躍如たるさまを見るのだが、さりとて諸手を上げて賛成というわけにはいかない。

もともと「政治」には「アソビ」の要素が皆無ではないし、むしろ適度の「アソビ」があってこそ「政治」に血も通う。しかし、こちらがアソンだつもりでいても、気がついてみたらアソバレていたという危険も介在する。私たちが何より大事にしなければならぬ「自由」を守るためには、「アソビ」もホドホドにといったところだろう。

でももし、氏が本気で政治に身を投じたいと考えるなら、私は真剣にそれを受けとめて忠告したい。「それほど思いつめるならおやりなさい! でも『革自連』なんぞというヘナチョコ政治結社ではなく、チャンとした政党で……。何なら自民党へご紹介しましょう」と。

お断りしておくが、私は氏の『からむこらむ』が、アソビの度が過ぎていると云っているのではサラサラない。むしろ全く逆で、時勢オクレの新左翼の機関誌化してしまった「話の特集」の中で、『からむこらむ』は一服の、そして恐らくは唯一の清涼剤であり、極言すれば、現在の「話の特集」は『からむこらむ』ただ一本で持っているのだ。株主の一人として、私はこのことを声を大にして云いたい。矢崎編集長よ! よく考えてくれ。

(平成元年6月　新潮文庫版『からむこらむ　パート2』より)